会について
入会～セカンドオピニオン
入会早分かり
入会案内
セカンドオピニオンについて
講演会のご案内
過去の講演会・DVD販売
ニュースレター
がん医療の今バックナンバー
これがセカンドオピニオンだ
推薦書籍一覧
コラム
リンク集
支部
甲信越支部
北海道支部
滋賀県支部
カスタム検索
サイト内検索

本サイトでは一部のデータをPDFファイルの形式で提供しております。
AdobeReader(無料)ダウンロード
FlashPlayer(無料)ダウンロード
ACCUTHERA
株式会社 アキュセラ
協賛会員
株式会社エーイーティー

もっと市民のために シリーズ がん医療の今

HOME > がん治療の今 > No.324 20170516

『看取りとその後…生前葬の勧め』

死生学研究会代表 内田 誠

内田さんは編集子の高校の同期の友人です。最近でこそ「死生学」というような研究が盛んになっているようですが、内田さんはご自身の経験等からずいぶん前から「死」の問題に取り組んでこられ、「死生学研究会」を主宰して、東京・八王子市を中心に活動しておられます。
この研究会の活動の一環として年3回のセミナーを開催しておられます。
このセミナーについては「市民のためのがん治療の会」の皆さんにもお知らせしており、参加される方もおられます。
今回はこうした活動の中から、ご自身の奥様を亡くされた経験と「生前葬」についてのご自身の経験を踏まえた考え方をご寄稿いただきました。
確かに3・11のように一度にたくさんの方が亡くなることもあれば、交通事故であっという間に亡くなるかもしれません、こういう不条理をわたしたちは経験しています。
みなさんも色々なお考えをお持ちでしょう、それはそうとして、永年「死生学」に取組んで来られた方のいわば実験ともいえる考え方に触れていただければ幸いです。

（會田 昭一郎）

はじめに

筆者の妻が今から1年5か月前の2015年12月16日に、末期がんで死亡しました。筆者は19～20歳の頃死に直面し、3年程で死の不安や恐怖を乗り越えて、その後ハイデガーの「存在と時間」に出会い、長い間死の問題を考え続けました。たまたま病院嫌いの妻ががんに罹り、がんに気づいてから9か月後にあっという間にこの世を去りました。

人がこの世を去る大変さと共に、看取る人の悲しみや心の変化の体験をお話しします。筆者はたまたま、生前葬を済ませていましたので、生前葬の意味についても考えたいと思います。妻は明るい性格で、先の事はあれこれ考えない人で、結婚当時、筆者が死の話をすると、そんなことは、その時に考えれば良いんじゃないの…等と余り関心を示しませんでした。考え方はある面、正反対で「犬が西向きゃ、尾は東」でしたが、何かをする時の意見は奇妙に一致していて、色々な苦労や楽しい経験をしました。

先々月の3月25日に第25回セミナー（講演会）を行い、「死生を語ろう！…看取りとその後」で妻の死を皆様に初めてお話しました。セミナーを始めて調度10年目に、妻の死を語るとは予想もしていませんでした。筆者は「生死（しょうじ）は今正にここにあり、怠らず努めよ」の心で毎日を生きています。「生が終われば、死も終わるのだ（寺山修司）」にも共感し、その通りだと思っています。筆者の葬送は、一般葬、家族葬、直葬（家族葬から宗教的儀礼を除く）の内、どちらかと言えば家族葬に当たると思います。

看取りとその後…心の変化

2011・3・11の東日本大震災の少し前の2月1日に、夫婦だけで生前葬を行い、同年10月7日、妻が小脳出血で倒れ入院→退院→リハビリを経て、言語に多少不自由な状態ながら何とか普通の生活を維持していました。その後2015・3・17に、通院病院でのCT検査でがんが見つかり、その後大学病院での検査でがんの詳細が判明しました。